
Fate/kind king

マテバオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / k i n d k i n g

【Nコード】

N 4 8 9 5 C

【作者名】

マテバオ

【あらすじ】

正義の味方を目指す 衛宮士郎は、聖杯戦争で優しい王様ガッシュ・ベルと出会う。

P r o l o g u e (前書き)

この作品は金色のガッシュとFate/stay nightクロ
ス物です。

Prologue

土蔵に差し込む光が、俺の意識を覚醒させる。

「ん…朝、か…起きないと、な」

いつものように朝食の準備を開始するため、固い床から身を起こす　って、

「…また土蔵で寝ちゃったのか…？」

そう、此処は半ば雑多な物置と化している、屋敷の一角にある土蔵。

此処で鍛錬するのが、俺の日課となっている…訳だが…。

「…そのまま眠りこけたって事か」

またやってしまった…いや、それより片付けが先だ。
なにせ、昨日はストーブを少しいじってたからな…。

そう考えながら、俺は工具等を片付ける

が、本来なら無いはずの物を前に、行動を一旦中止。
それを拾い上げる。

「…なんだこれ？」

それは、プリッツの箱に割り箸を四本突き刺した、まるでロボットのような物だった。

当然、俺にはこんな物を作った覚えは無い…と言うより、こんな

雑な物は作らない。

とすると……。

「……藤ねえの奴……また勝手に入り込んだな……」

ため息をつきながら、これの対処に思考を費やす。

「……あの虎の物を、丁重に扱う必要は無いか」

仕舞う場所もあまり無いし、そろそろ桜が起こしに来るだろうしな……よし、決定。放っておこう。

そう考えて、俺は土蔵のシーツの上にそれを置く。

それが、アイツを呼ぶ触媒だとは、この時は知るよしも無かった

ソシテ歯車八動キ出ス

優しい王様、召喚

俺は、また殺されるのか…！？

「筋は良いが…若すぎたか…まあ、魔術師に斬り合いを望むべくもないが…」

こいつと赤い奴の殺し合いに居合わせたから、殺されるのか…！？

「もしかするとお前が7人目だったのかもな…だとしてもこれで終わりなわけだが…」

もう、これで終わりなのか…？

「じゃあな、坊主。今度は迷うなよ…！」

俺の眼前に、紅い槍が迫る。

ぬ？シヌ？しぬ？死ぬ？

俺は、ここで死ぬのか？

前回の焼き直しのような動きが、スローモーションに見えてくる。

冗談じゃないっ！

俺は、まだ誰ひとり救えていない…！

俺はまだ正義の味方になれていない…！

左手が、熱を持ったように疼く。

オ
レ

衛宮 士郎は、まだ死ぬわけにはいかない……！！

最後まで抗うと決めたその時、激しい光が辺りを覆った。

「な……何！？まさか、7人目のサーヴァントだとっ！？」

青い奴が、急な出来事に驚いて動きを止める。

刹那。

「がっ……！！？」

電撃が奴を、土蔵の外にまで押し返した
！！

俺は、あまりの展開の早さについていけず、ただ目の前に立っているソイツを見ていた。

金色の髪を持ち、黒い外套を身につけ、
子供らしいような、それでいて強い眼差しをこちらに向け、

「
問おう」

声変わりする前の、若干高い声色でソイツは言い放った。

「お主が、私のマスターか」

「え…マ、マスター…？一体、何の事だよ…？」

何を言っているのか、コイツが何者なのかも俺には理解出来ない。

するとソイツは、

「又？…しかし、左手に令呪があるではないか？」

そう言って、俺の左手の甲にある模様を見せ付けるようにする。

…あれ？…こんなの、さっきまで無かった筈なんだけどな…？

未だによく判っていない自分に、ソイツは改めて俺の前に居直し、

「…サーヴァント・パートナー、召喚に応じ参上したのだ。

これより私の心はお主と共にあり、私の雷はお主の道を切り開く。

ここに、契約は完了したのだ」

7

やっぱりよく判らない、何かの前口上の言葉を発した。

俺が対応に困っていると、ソイツは…

「先程の者が、まだ表にいるみたいだの…スマヌ、私は行ってくるのだマスター！」

そう言って、土蔵の外へと飛び出ていった…って、オイ！？

「アイツ、何を考えて…っ！！」

仮にもアイツは子供だ、あの青い奴に敵う訳が無い ！！

俺はアイツの後を追うために土蔵から出て…その考えの甘さに氣付いた。

青い奴 どうやら、さっきの電撃はあまり効いていなかったら

しい とアイツが、緊縛した空気を纏いながら対峙していたのだから。

「…一応聞くがよ、小僧。この勝負、次に預けるつもりはねえか？
悪い話じゃないだろう？そら、あそこで惚けているオマエのマスターは使い物にならんし、オレのマスターは姿をさせねえ大腑抜けときた。」

ここはお互い、万全の状態になるまで勝負を持ち越した方が好ましいんだが」

そんな事をのたまった。

が、それは青い男にとっては本当に『一応』の話のつもりだったのだろう。

いつでも戦えるように出来る、その槍の構え方が何よりの証拠だった。

だからこそ

ソイツが何かを考え込むように俯き、そして

「ウヌ、それもそうだな」

などと、その話を了承した時、誰もが固まるのは至極当然の事だった。

「え、おい？」

もう、訳が判らない。

少なくとも、今の言葉はこの場で言うものじゃないだろう。

ほら、青い奴だって啞然としてるじゃないか。

「…あゝ、小僧、その言葉は本気か？」

あげくの果てには、聞き直してるじゃないか…。

「又？」

この場で冗談など言う訳がなかるう？」

いや、まあ、確かにこの場で冗談なんて言えたら凄いいけどな？

「それに私がお主の前に出向いたのは、戦うためではなく　追いつ
払うためだからの」

「…チツ、闘う気が無いなら此処に居る意味はねえな…いまいち納
得がいかながな」

結局、そう言って青い奴は渋々と立ち去っていった。

これで、ひとまず安全か…。

さて、残る問題は…。

「又？どうしたのだ、マスター？」

今、俺の目の前にいるコイツだ。

「だから、そのマスターとか、サーヴァントって何だよ？」

そう言つと、ソイツは目を丸くした。

…俺、変な事言つてないよな？

「マスターは、聖杯戦争を知らぬのか…？」

「何だよ、その聖杯戦争って……というか、マスターって呼ぶのはやめてくれないか？」

俺には、衛宮士郎って名前があるんだからな」

「ウヌ、では士郎と呼ばせてもらうのだ。

私はガッシュ・ベル、よろしく頼むのだ」

「ああ、それで聖杯戦争って一体」

俺がソイツ　ガッシュに投げ掛けようとした疑問は、此処で遮られる。

「　　あら、衛宮くんは何も知らないのかしら？」

此処に居る筈が無い、第三者のそんな言葉で。

「　　」

無言で、俺をうように、俺の前に立ち塞がるガッシュ。

チラチラとこちらを見てる感じからして、指示を待っているのだろつ。

だけど、俺はそんな事には気が回らない。

だって、塀の上に立ってるのは、その、間違いなく

「お、おまえ遠坂……！？」

「ええ。こんばんは、衛宮くん」

につこり、と極上の笑みで返してくる遠坂凜。

「あ　　う？」

それは、参った。

そんな何気なく挨拶されたら、さっきまでの異常な出来事が嘘み
たいな気がして、何が何やら分からなくなる

待てよ？

「なんで、遠坂が此処に居るんだ？」

そうだ、何故今さっきまで人外の戦闘が起こっていた此処に、都
合良く現れるんだ？

「…決まってるでしょう？」

その疑問が意味成す事、それは

「私が貴方と同じ、サーヴァントを従えた魔術師だからよ」

あの青い男と同じ、敵であるかもしれないという可能性。

いつ戦闘が起こるか分からない、そんな状況で、つい自分とガッ
シユの位置関係を気にしてしまう。

「あ、身構えなくてもいいわよ？

私はただ、自分の立場が判ってない衛宮くんにご色々教えるつも
りなだけだから」

「　　は？」

「だから、教えてあげるって言ってるのよ。

今のその子　多分貴方のサーヴァントなんでしょうけど　と
の会話からして、何も判ってなさそうだからね」

…えっと、俺はどうすればいいんだ？

その答えを得るために、ガツシュに目配せをする。

「……ウヌ、戦わなくていいのならば、そうした方が良いのだ」

どうやら、俺と意見が一致したらしい。

そうしたら、此処で言うべき言葉は一つだ。

「　それじゃあ、外は寒いから一旦中に入ろう。
説明はそれからだ」

そう言って、俺とガツシュは先に中に入る。

自分に向けられる、憎悪の塊を気に留めながら

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4895c/>

Fate/kind king

2010年12月30日20時47分発行